

天谷直樹さん 土地があつて人間がいるんでないんやね。人間が行くところにいろんな土地がある

平成二六年五月二七日

福井市 宮川和也

天谷直樹さんは、私・宮川和也の地元(岡保地区)の前公民館長。昭和十六年四月三日生まれの七三歳。現在、岡保地区の歴史を精力的に調査されている。かつては、高校教諭(保健体育)。



●子どもの頃 戦争の記憶が無い

私の場合、戦争の記憶が無いんです。戦争が終わって、新教育体制になったところから、学校教育を受けているんですね。だから…よく、昔の教科書に墨で消したところがあつたとか聞いているでしょう。あれは、私、経験ないんです。

昭和十六年生まれで、(小学校が)二三年だから…GHQの傘下が終わって、動き出した時点ですね、新しい教科書に変わって動き出している段階やね。…どこの年齢層でどういう影響を受けたかというのが、生きてく上での…いわゆる外からの影響ですね。

●激変 農地解放 父は公職追放 どん底に

うちの家庭で考えると…地主で生活していたような、小作から米をもらって売って生活しているような者が、終戦の段階で農地解放が出てくるでしょう。父親がその時の(岡保村の)村長なんです。終戦のときのね。だから公職追放って、公的職業に就いている者は全部ダメになったんです。軍国主義の片棒を担いだ人間ですね。在郷軍人の支部長は、みんな村長がしてたんですね。だから、公職から追放されます。

まず、小作料は入ってこない。それから、農地解放で、田んぼは自作と小作を各各一町歩だけ残されたんですね。うちは小作に出していた部分で六反くらい残って、自作は四反くらいしか作ってませんでしたから、生活が完全に出来なくなってくる。だから、生活苦がいつぱんにドーンとくる感じですね。父は役場に勤めていたわけですから、今の時代なら年金みたいのがもらえますけど、ほんなもん無いでね。生活はどん底になりましたね。あの時点ですね。

そういうような中で動いていく子供時代がありますけど、それは外部の条件ですよね。国全体の変化の流れの中で、同じようなケースになる家(うち)はどこでも出てきますよね。で、子供時代はそんな感じでも過ごしてくわけですけど…

岡保村自体はもつと後まで続きますから、あらためて、官選の村長が無くなって、公選制の選挙になって、第一回目の村長さんが、曾万布(そんぼ)町の水野篤さんです。その前までは、村会議員を選んで村会議員の中から村長を選んで、それを県が認めるっていう感じの…官選制みたいな感じですね。村長には給与も何もないっていう、名誉職みたいな状態ですからね。役場に勤めながら地主をして、そこから年貢もらって

仕事をしていたみたいなのが無くなっ
ていくと。

●生活を支えたのは母親

それから生活を支えるのは、母親が生活を支えるというような格好になっていく。で、今まで何もやってなかった人間が、実家の、細安って呉服屋があるんですけど、そこから嫁に来ていたから、自分で若いときに商売を経験してたから、呉服を売り出して、それで生活を支えていくんやね。

●子どもの頃の岡保地区の様子 農業と機屋

それで、あの時に、岡保の地区なんかは、昭和十六年から二十年くらいの段階ですから、農業と、ごく一部の機屋さんみたいなものが、岡保の中の総収入の六割から七割は占めてるっていう時代ですね。農業収入より、機屋がバーツと入りこんできて、日清戦争やら日露戦争やらで需要が急激に伸びてくる時代ですね。最も景気のいい時代、機屋さんの収入が大きい時代ですね。

ただ、そういう外の問題とは別に、岡保そのものの中に居るときに、今、70代になって感じるのは、この自然の中に育ったっていうのがものすごく大きいですね。よく、日本全国の中で福井県というのがどんな位置にあるか、福井市がどんな状態にあるのか、その中の岡保がどうなんだっていう言い方になってくると…全国の中で福井県なんかは保守的で、あまりものを言わなくて、我慢強くて、自己主張もしないと。いわゆる農村地帯の第一次産業的な基盤があつて…その中で、典型的なのが岡保やね。

●家族のしつこ

すると、そういう所で育ってきた人間って言うのは…父親の兄弟を見たり、私らの兄弟やら、私らの子供を見ても、長男は家に残ってのほほんとして、あまり変化の無い生き方をしてきてるんですね。で、次男三男っていうのは、そこには居れないんですね。だから、ものすごく勉強して外へ出て行っています。

今の私のきょうだいでも、女二人がいまですけど、一番下が一番活動的やね。父親の兄弟は、一人医者になって、一人は軍人になってますけど…陸軍中将までいってますね。本当なら戦犯になって犯罪者になってるんやけど、終戦前に退役してるんです。年齢的にそういう状態になったんやね。だから免れたみたいなの。下の方の弟は、金沢の医学部…昔の医専出て、北里柴三郎の研究所へ勤めてて、独立して医者になってね。だから、家には居れないんだって分かってる連中は、しっかり勉強して、福中（福井中学）出て大学へ入っていったりして、家から出て行ってるっていう…

長男だけにしか土地とか財産は相続権が無かったですよ。そういう時代の流れなんです。それが完全に分かっているから、外へどんどん出ていくっていう…。

私らが子供でいるとき、おじさんが帰ってくると…軍人やった人は、終戦のときにしばらくうちに住んでたんですけど…「しっかり勉強しろ」とかね。…中学時代くらいやっただけなあれ…いろんな本の題名挙げながら言われたのを、よう覚えてます。代表的なのが「橋本佐内の啓発録を読め」って言われました。福井県出身の人間ですから…人間の向上心みたいなのはつきり言っているから読めっていうことだったんだと思うんですけど。

おじさんの息子連中はみんな、住んでるのが地元じゃなく、外へ出ていきますから、うちへはおじさんの子供の一番下の子供が養子に入ってたんですけど、…軍人って、飛んで歩いてるものだから、子供なんかどうもならんちゆなもんで、一人だけ養子にもらってたんですね。それがほら、直弘（天谷直弘・経済評論家、元資源エネルギー庁長官）って、福井市の名誉市民で、額が市役所にあると思いますわ。それなんかも結局、自分の親が住んでる家は長男が継ぎますから、自分は弟だし、自分で勉強するっていうね…父親が軍人で、戦争に強烈な反発を感じながら勉強していった人間ですね。おじさんの子供はみんな医者なってますね。

僕のお祖父さんになる人が医者やったんです。その時代の軍国主義が背景で軍医になって。下の弟は、自分の親の、医者の流れを汲んだっていう…そういう形ですね。ほかの人らも…うちがバタバタになったのを（農地解放と公職追放で）、良く分かっているから。

高校時代くらいかな…おじさんのうち…東京に住んでましたから…に遊びに行ったときは、小遣い銭をよくもらいました。で、カメラ…「持ってるか？」で、「持ってません」って答えると、「これ持って帰れ」とか…「腕時計あるか？」「ないです」、って言うのと、持って帰れとかね。

大学行くときも、母親の弟が東京で勤めてて、福井市内に戻ってきて商売やってたんですけど、「もう田んぼの時代でないよ」って。残ってる小作で上がってきた田んぼやら、自作で作ってる田んぼを売ってでもいいから、大学出させてね。それを母親に言ったみたいですね。

●長男は家を守るよじいじい

それから、東京へ出て行った僕らの従兄…戸籍上兄貴になりますわね、直弘は。ほれに、母親が相談してたら、…私が東京の大学行こうかと思うとか、私立だけ受けようかと思うとか言っていたら、「福井に福井大学があるだろ、金沢に金沢大学があるだろ、何しに東京まで出てくるんだ」って。

長男はやっぱりうちに残れちゆうことやね。医者になった叔母さんやらも、天谷の家のルーツは、直樹さんどこにあるんだと、だから、その家だけは、きちんと守らんとダメだよ、って言い方をされました。

結局自分らは東京に出てきて、根無し草の状態で、自分らで土地を買って、そこで居ついたけど、もともとの、帰ろうという場所は福井の家なんだよ、だからどこへも出ていく必要ないって。そんな言い方をされました。これが、田舎から出て行った人間の、その時代までの考え方ですわ。

●長男が家を出るのは高度経済成長期から

結局、しみついてるんやね。そういう同じことをずーっと言われながら育ってきた人間が、僕らの年代なんです。だから、長男が出て行っている年代ちゆうのは、我々の年齢層まではほとんど無いです。もうちよつと下やね。高度経済成長の段階に入ってくるころから、岡保を離れていってるとね。長男が家を離れて次男が継いでるちゆうのが、ぽつぽつと出だすんやね。今はもう、長男が外へどんどん出て行ってますわね。てことは、いわゆる財産…土地とか、自然とか山とか、家とかっていうものの流れが、ちよつと高度経済成長を経て、切れた時代やね。そこから上がってくる生産みたいなのは、給料でずっといるのと比べたら合わないから、どんどんそういう

変化をしていった。

そういう中で僕らは勤めることだけをやって、長男坊で残ってますから、次男坊やら三男坊ならもつと違った考え方したんかも知らんけど：住んでる家はあるわ、食べ物：米は何とかなるわ、野菜は採れるわ、まかり間違つてクビになつても、生きていくうえでの必死さはないんやね。真面目に仕事して、ただ黙々と仕事してたら、高度経済成長の間に、教員の給与なんかも、田中角栄の所得倍増でダーンと上がつてた。だから、比較的楽に生活ができたってね。さほどあくせくしない環境の中で生きてっている感じやね。

●自然の中に生きるということ 自然の力の凄さに対する驚きと敬意

もう一つ、これは、あなたのお父さんらの話聞いても分かるかもしれないけれど、自然の中に育った人間の心の中に、自然と浸み込んでくるものがあるんやね。周りに花とか草とか稲とか植物やとかあるんやね。僕らが仕事していく上での信念みたいなものかもしれないけど、自然に対する畏敬の念ちゆうかね、自然の力の凄さに対する驚きと敬意っていうかね：

一番簡単なのが「花の色」みたいなもんですね。あんな美しい色：あの：描いてる花の色、いっぺんじつと見てみるといいです。結局、どんなに頑張つてもあの色は出てきません。写真で撮つても、絵で描いても：バラならバラの花の、ふわーっと出てくるいろんな色合いついていうものは：どんなに頑張つても無理やね。

たとえば春先に：これは絵を描くようになってからそんな感じを思ったんですけど、春先に、葉が落ちてしまった木の枝がいっぱい残ってますよね。あの、枝なんか折る

のは、そば通つて邪魔なると、ペツと折るのは何も気にせんでしょ。ね。ところが、あの小さい枝一本一本に新芽が出るんやね。新芽が出たものが、枝をすーつと通つて、そしてそのエネルギーを木の中に残してきて：下の根から吸い取つたエネルギーとではじめてあの、「幹」ができるんやね。

何百本というような細かい枝があつて、幹があるんやね。そういう不思議さっていうか、当然の当たり前として受け取つてるものに、何かの機会にぽつと気が付くってね。自然が教えてくれる凄さって言うか：あれはだから、みんな折つたら木は枯れるんやね。そういうようなものが、野菜にしても何にしても、何となしに自然の摂理みたいなものは、田舎で育つた人間には残つてるんだらうと思いますね。

だからよく、宗教問題なんかの人が宣伝に来ますわね。そういうようなときに、僕ら教員でしたから、お父さんらも同じだろうと思えますけど、教員は一つの宗教に対する話を生徒の前でしたらダメなんです。浄土真宗なりキリスト教なり仏教なり、それに入りなさいっていう指導はしてはいけないんやね。

じゃあ、その中で、代わるべきものは何だつて言つたら、ひとつの定理っていうのは、自然の摂理やね。決まりきつたことであり、自然の力つてもものであり、人間の力でどうしようもできない不可抗力のものであり、それに対しては、きちんと敬意を持つて接しなさい：だから、信仰と同じやね。

宗教そのものは、否定しませんけど、有史以前から今の時代まで連続と続いている事実ですから、必要ないものならとうに消えているはずやね。消えないっていうことは、人間にとつて絶対に必要なんやね。だから、宗教学は学ばないといけないけれ

ども、一つの宗派だけの話を子供にすると、家へ帰って子供が「先生こんなこと言うた」って言う。すると自分のとこの宗教と違っていると必ず反発されますわね。

だから、全体の、ものの考え方で、誰も否定できないような摂理みたいなものでの思想みたいなものは、僕らの場合は、自分の地元の自然の中で過ごしてきた中から、自然ていうものの偉大さつちゅうなのは、自然に身に染みてきたような気がしますね。

●田舎の中にある慣習

岡保なんかの場合は、自然との闘いの中でできてきた慣習ちゅうのが、いっぱい出てくるんですね。農業なんかをやろうとしたときに、自然相手の仕事ですわね。すると、一番基本になってくるのは「水」でしょ？だから、水の流れみたいな：水は上から流れてくるやつを一番末端の田んぼまで共有するんですね。だから、非常に大事に管理されながら、みんながお互いに助け合いながら、その水が末端まで行くためには、ルールが必要になってくるんですね。だから、共同体って格好になりますね。

田舎にある習慣やら慣習・伝統みたいなものは、「うるさい」っていう風に若い人は捉えるけれども、農業が主体であったときには、それをしなかったら生活できないんやね。自然との闘いですね。

虫が出てきた、となりのうちの田んぼに害虫が出た時に放っておけば、その隣もその隣もみんなやられるわね。だから絶対にそれはだめだ。草が生えた田んぼを放っておけば、隣もダメになっていくね。だから一緒に防除しましょうとか、一緒に、病気にかからないように草も生えないようにみんなできちんと（やってきた）

村ん中に人足あるの知ってなるでしょ。

いわゆる春人足とか夏人足とか：そう。江堀り。人足って、人の足って書くんですね。だから、江堀りの人足を出していくってのは、村の中の共通理解なんやね。

田んぼが多かろうと少なかろうと、自分のところも水をもらう、人にも水を渡さなといけないっていう：地区全体に流れる水を、ちゃんと確保するためには、みんな一緒に日にちを決めてやりましょうと。だから、そういうような考え方のもの、自然への対向に対して、否応なく、お宮さんとかそんなものなんかは、皆で共同で守っていく。あの、神への恐れみたいな形のものとか、自然へ対向していく：町ん中には、そんなこと、ほとんど無いでしょうけどね。五穀豊穰の祭りみたいなものとか、子供んときから、ほれに出てるんやでね。小さい時からそういうものに接してきて、意識下に残ってしまうんやね。やっぱ、今ななってわかるんやね。ほんな感じがね。

やっぱ、自分の中にそんなのがある、だから、自然に対しての中から自分の性格が作られてきている部分と、自分らのおじいちゃんおばあちゃんから代々伝わってきた、その中から出てくるもので作られる性格ちゅうんですかね。それは、町ん中よりも田舎のほうが、「自分の出た家だ」っていう考え方が非常に強いんやね。だから、「お前しっかりせえよ」「しっかりせえよ」ちゅうのは、もう、常日頃から入ってくる。

だから、自分のところの家の代々の流れみたいなものとか、いろんなものを自分の中に加味しながら、ちゃんとがんばって守って：「お前がんばらんとダメだぞ」っていう風な言い方が出てくる。

じゃあ、今の僕らの子供に対してはどうだっけなってくると、土地とかそんなものが無くなってくる、ただし、自然の中から

得てくるものはそのまま出てくるけれども、先祖みたいな形の流れみたいなのは…：今度はどうどん外へ出ていく時代になって。

7 カナダに住んでいる娘（1）

で、結局、長男は僕の後を継いだから家に残ってますけど、下の妹はいま、外国で結婚して子供産んで…カナダに住んで、IBMへ勤めてますね。

私らのおじさん連中の子供、わたしらのいとこ連中ですね。みんな外国に出てるんですって。で、いとこの子供なんかも外国人と結婚して、そのまま行ってるのもいれば、ヒューストンから人口衛星が打ちあがったときに、日本に向けた放送していたNHKの放送で通訳してたのがいまして、女の子やけどね。

みんな外へ出て行ってるんやね。医者の中中やらも二年なり三年なり外国で研修して帰ってくるとかね。男であろうと女であろうと、どんどん出ていくんやね。

ほうすると、あんまり気にならんのやね。みんな「女の子をなんで外国へ出したんだ」って心配されますけど、僕がその子供の死ぬまで面倒見られるわけ無いんやで、僕のほうが先に死ぬんやで、二十歳になったら、自分の責任でやれよって、そんだけのことやね。お父さんやお母さんは絶対お前らよりははよ死ぬんやでな、って。

そういう感覚は、人のつながりの中で、だんだん感化されてる部分やね。それと自然の中に入ってくる部分。両方が生き方を…：福井県独特の、地味で黙々と仕事をしていって、考え方から言ったらさほど派手ではないし、何でもない。ただ、家だけはきちんと子供らに継がせていきながら、ただし後はどうでもしろよと。時代が変わってしまうんやで。

田舎の中にいるだけではもう通用しなくなるし…

● 岡保にある財産

今の農業を考えても…：自然からもらった財産はあるんですね。岡保の中に。どしつと、田んぼそのまんま残ってるんやね。山もあるんやね。それをどう活用するかって考え方で、今までの活用と活用の仕方を変えれば、資産はあるんです。ものすごい資産はあるね。

ただ、今までみたいに皆が分割してちよこちよこちよこちよこと稲作ってたって、ほれはダメやね。だからほの財産になっていく大きな資本みたいなもの、水もあれば山、土地もあれば…：自然環境は昔のままのものが残ってるんやね。そういうようなものを、今の交通機関が発達したような時代の人間が、昔と違った形で外部の需要があるようなものを、どう置き換えるか…：だから、発想さえ変えれば、落ちぶれることはないと思う。

時代が流れても、宗教みたいなものも消えない、お医者さんも消えない、教育って分野も消えないんやね。ほれと食べること。食料も無くなりはないんやね。だから、どういうように採算性を合わせるかっていう…：食料を作る大きい工場は持ってるんですって。岡保は。いや、それが、五人か十人でやるようになるかも知れませんか。機械使いながら。

自分がそれを受け持たないような状態。結局家とか土地とか、そういうものに縛られる必要が無くなって感じた。いとこなんかが外国に出てて、話を聞いてくる、自分の娘が外国に出る中で、土地と人間を結び付けることと自体に無理があるんやね。今の時代は。

土地があつて人間がいるんでないんやね。人間が行くところにいろんな土地があるだけで。人間の方が先なんやね。

今まで家があつて子供（長男）がいた。土地があつて家があつた。生きるための基盤が、食料の原点になる土地が、最初にあつたんやね。

岡保の中でも僕らの年齢層の者は、長男はほとんど家に帰つて、家を継ぎながら、そこを守つて生きていつてる。ごく自然なんだけど。今の子供らの場合は、自分で最後に勝負できるのは、時代がどう変わろうと、自分が今、頭の中に持ったものは誰も盗つていけないね。不景気になろうが何をしようが、これだけは絶対自分のものなんや。財産なんやね。

だから、頭の中という財産を鍛えておいて、それを生かせる場所へ自分が行けばいいんですつて。そこに住みついて、そこで、自分がやりたいことを思い切つてやる。「発想を変える」つちゆうかね。そういう時代のところに、日本はもう完全に突入してしまつている。

●これからの日本

しかも、日本は世界の中で高齢化社会の、いちばん最先端を走つて：いわゆる人口的成熟社会なんやね。いまの、自由主義とか経済主義とかいうものは、どんなに日本の文化が進んだつて言われていても、政治学みたいなものやら、自由主義の本当の理論みたいなものとか、未成熟な部分はいっぱい残っていますね。いわゆる資本主義社会みたいな考え方は、産業革命つて言われたヨーロッパのスタートの時から、何百年つてかけてきてますね。

日本は明治維新から二百年たつていない。まだほんなんもなんやね。まだ三代目か四

代目くらいのもんでないかね。そういう中で親から子供へ教えを受け継ぎながら、その時代の道徳観とか経済観とかいろんなものを受け継ぎながら、それくらいでは、本当に変わつてはいかないね。昔のしきたりが残るんやね。

●カナダに住んでいる娘（2）

日本の場合は、人口だけは本当の成熟状態で、経済の部分もある程度来てる。そういうような状態の段階で、次に動いていくときに、新しい場所はどこだ：つてときに、カナダを思いついたんやつて。娘をカナダに行かしたのはそれや。安全性があつて、ある程度社会が、人口が発展途上国で、しかも多国籍の人間がいっぱい入りこんでいる。だから、あそこならまだアメリカよりは安全やと思うつて言うて、行かせたんです。

最初は西海岸に入ろうとしたんやけど、日本人が西海岸では周りに沢山いるから、いつまでたつても語学が伸びんで、日本人いないところに移りますつて言つて、モントリオールに移つたんやね。最初は語学研修で、あと、カナダの大学に入り直したんですわ。そのまま住み着いてしまつて。自分でやる気さえあれば、新しい生き方を考えればいい。日本で就職してないですから、帰つてきたつて通用せんね。日本の企業でも、外国企業に近い感じで動いているところなら通用するんでしようけど：

カナダにいてね、副社長と一緒に日本の企業に来て、提携を組んで仕事をするといいので、説明しに来た時に、「日本の会社は何て会議がだらだらだらだ：会議はつかりや」つて。

ほれともう一つ、担当は自分で、副社長はあいさつに来るようなもんに、「全然私

を無視して、副社長としか話をしようとし
ない」って。

結局、女に対する感覚は、日本人は外国
と全然違うって。びっくりした、って言っ
てるんやね。

インドなんかは、三十人なり四十人なり
使って、プログラムをたちあげると、すぐ
担当者としての扱いに変わるって。日本は
まだ男と女の扱いの差が残ってる。

「私は日本へは戻らんわ」って。

今は、仕事は、会社へ行かんのやでね。
家で仕事してるんやでね。時々会社へ出て
行って、連絡だけして、あとは自宅で全部
自分の仕事すると。そういうようなシステ
ムの違いみたいなもんやら、給料の上がつ
ていくスピードなんかも、力さえあれば、
上がってくんやね。

うちの息子と娘と：四つほど違うんやけ
ど、給料は完全に逆転してるね。ただし、
いつクビなるか分からん。必要なくなれ
ばポーンとクビになる。そういう契約社会
ね。おもしろいななど。

話をいろいろ聞いてると、家とか土地み
たいなものも：(カナダは)家に履歴書が
あるんやね。何年に誰が使っていた、修繕
はいくらかけた、そして何年に誰に売り渡
された、そのときはいくらやった、みたい
な、全部克明に住んでる場所に経歴がある
んやね。それで、いつでも「Sale」つ
て形で売り出されて、自分の給料が上がる
と、それに見合う場所へ移動していく。

建物はあくまで一つの物件なんやね。住
んでる「手段」っていうだけで。それを自
分がどれだけ丁寧に使っていたかというこ
とを書いてあれば、価格に跳ね返る。だか
ら、「建って何年」ではないって言うんやね。

そういう面白い話を聞いていると、時代
が変わり、土地が変わり、文化が変わって

いくと、制度がみんな変わっていく。それ
が今の時代、グローバル化してくるって
いうことになってくると、それに適応するよ
うな人間でないとダメになってくる…

カナダに行くと、カナダとしての自然環
境があるんやね。これは森林なんやね。岡
保で、この自然環境の中で人間がどう適応
していったか、どう発展してきたかってい
う形は、カナダならカナダの自然環境に
じてどう変わるか、ただしここに経済発展
がどう加わって：外部条件で変わっていく
だけ：原点になるものはあるんやね。ここ
も、向こうも、「変わらないもの」はあるん
やね。ただ、見方の違いだけで。

カナダは寒いし、ここは温かいよって：
それで文化が変わってくるし、そこでの経
済発展も変わってくるし、モノの考え方も
変わる。そういう見方は、今からでも岡保
の中でも、実感して捉えれば、捉えられる
はずなんやね。

●岡保の発展

公民館長でいましたら、岡保の発展はど
うなんやと、いろんなこと言う人がいるん
やね。

ただ、僕らはこうしなさいってはいえな
い。調整機関やから、皆さんの意見の違
うものを集めながら、コントロールしていく
部分があります。

アドバイスの形で言ってるのは、岡保
っていう土地だけを見て、ものを考えるの
が正しいかどうか。世界の中の日本があっ
て、日本の中の福井県があって、福井県の
中の福井市があって、そして岡保があるっ
てことは、全体の流れが岡保にどう影響し
てくるか。

今、何を福井市はしようとしているか、
福井市が何か違うことをやろうとしている

ときに、岡保がみんなで結束して、違う案を出したって、ほんなもんは跳ね返ってしまうんやね。

福井市がやるうとしていっている中に、岡保の考えをいくらか入れてもらうっていう調整はあるかもしれないけど、正面から全然違うものをぶつけていったときに、果たしてどれだけ聞いてくれるか。

まず全国的な流れから、福井市はどう動く、なぜそう動こうとしているのか、それを捉えたうえで、岡保は、「これをするのなら、これと合わせながら、岡保はどっちの方向に行ったらいいか」と、議論するなら分かる。

まず岡保の実態と、福井市が東部をどうしようとしているのかというのを慎重に判断して、それをよく調整して、福井市の考え方を、講師を呼んで聞くとか、都市計画課はどう考えているかとかね。それを情報収集せんと、前へ進めんよっていうそういう言い方やね。

岡保の発展を考えていこうとするときに、岡保の地域コミュニケーションとか、岡保から出て行った人間が、全国とか世界の中でどうやって活動しているかをどう捉えるのか、人材を生み出していくものやら、経済発展みたいなものやら、人口が増えるように考えていくものやら：：こういう風に捉えるのか。地域の発展を、地域の中で、どれが一番いいと頼むんだと、それを押さえていないと：：実態やね。

でないと議論にならないのですわ。

岡保の中に、森と水と緑があつて、自然環境が素晴らしいと。これがいいから、岡保はいいところだつて言う人と、人口はどんどん減っていくし、岡保の中にコンビニ一軒もないので、田んぼと山しかないのは、何がこんなものいいんだつていう人とね。

基本が違うんやね。

福井市で捉えるなら、この地区は自然を確保して、食料を確保する場所であり、ここは商店街として発展させて、人間を集中させて、コンパクトシティを作ろうと考えるんやね。こういう、大きい目標があるんやね。

こういうものに反対して、岡保の中に住宅地作れつて言つたつて、福井市はうんつて、言わんわね。確かに近いですよ（中心市街地が）。近いけど、水道管もひかなあかん、下水管もひかなあかん、除雪もやらあかん。いろんなことを考えながら、維持管理費も考えながら、ここに人口集中してもいいかを捉えるわね。

そんなんなら、駅前のところには、はじめからあるところにガーと集めてもたほうが、楽でいいわね。

今の現状をどう捉えるかっていうのが、自然環境みたいなものも含めながら、岡保の発展つて何だつていうときに、非常に難しいね。

その時代その時代の捉え方も出てくるかもしれないけど、一番いい例がね、岡保の保育園。あそこは独特の運営をしています。定員六十名でスタートした保育園です。いま、百二十五くらいいるんですよ。今年なんか福井市から頼まれて、全部受け入れてくれたつて。福井市内の中では、定員に満たないような状態のところが出てきても、岡保はなんで、定員いっぱい人がいるんか？つてことは、自然の中で、自然の自由遊びをやりながら、それをやった方がいいと考える若い人たちが、あれだけいるつていうことですよ。

いわゆる机に座らせて、小学校の早くから英才教育でないけど、学問的な指導をしていくような保育園スタイルつていうようなものを、好まない親がいると。

だから、そういうようなものと、福井市

内の、いわゆる英才教育をやってくれるような保育園でないと嫌だという人もいる。価値観やね。その中にある価値観が、どっちがいいかっていう考え方になってくるから：そこに住んでる人だけの価値観で、全体が変えられるかっていうと、やっぱ、全体の中の一部でしかない、動かんね。

今のそういう感覚は、公民館に居るとよく分かるんや。いろんな人の意見があるで。そんなのは、聞いているだけでようわかるね。極端なこと言うと、宮地って場所に住んでいて、なんで福井市内のもっと便利な場所に出んのや？って言うのといっしょや。

価値観が、今のところにいる方が、ずっと自分としてはありがたいから、そこにいるっていうことで、出て行こうとしないだけだね。

もうちよつと、雪降ったときに出やすい場所くらいまで、近くに出ようかと考えたことあるかもしれんけどね。それでもないっていうことは、今はまだ、岡保の人間なんやわね。考え方的に、我々の時代の感覚と似通った部分を引き継がれている。家があり、土地があり、親もそこでずーっと一生過ごしてきた場所だし、その中の付き合いみたいなものもあるし、そういうようなものの中にいたほうが、自分が落ち着くってちゅうかね。

だから、そうでない、っていう人間は、みんな親だけ残して、アパートで住んでる人、沢山いるでしょ。岡保の中でも。そういうような感覚的なものっていうのは、自然と、知らないうちに刷り込まれている部分やね。まだ残ってると思いますよ。

●保健体育の教師に

で、僕ら自身、育ってきた形の中で黙々

と仕事をしている。

僕、保健体育が専門ですけど、結局、それ選んだってのは、ちょうど福井国体の直前が、僕らの卒業の時代です。僕は(昭和)三十九年(卒)で、福井国体四三年。四二年がインターハイですね。そうすると、その時代の教員の採用状況を見れば一目瞭然ですけど、結局四三年までは、一般教科の先生は非常に採用が厳しかった。採用者ゼロの年もあります。そういうのを分かっていたから、高校の先生が、絶対就職するならば、保健体育なら確実に入れる。体育なんかもそんなに嫌いでなかったから、それで選んだ。

小学時代体が弱くて、学校へ満足に行けなかったんです。一か月くらい休むときもあったから、母親が心配して、中学校入った時に、体を鍛えるために部活に入ってくれて。体が弱いと先生からも入れるの嫌わね。頼み込んで、バレー部に入れてもらって、三年間やってるうちに、体が元気になつていった。

運動が得意で体育の教員になったんではないんです。福井県の体育の教諭やと、福井県で優勝したとか、活躍した人間が多いですね。僕らは体育専門学校は選べないから、教育学部の中の、体育が取らせてもらえる、金沢(大学)に行ったのはそれです。だから、実技試験は無いんです。そんな時代です。大学も授業料払わずに出てるし。さつき言ったように、どん底の状態だったから、正直に申告したら、地主は大変な目に遭ってるんじゃないかって、分かっている人がいて、授業料免除や。寮費も免除や。寮の食事代は払わんとあかんけど。

それで四年間過ごしてきた。勉強せんかったけどね。アルバイトばっかしてて。父親が大学二年のときに亡くなりましたから、あとは母親の仕送りをもらうだけですから。

